

『平成 27 年度 かがやき ー第 4 集ー』(2016 年 3 月出版) <pp.5~6 掲載>
新潟市立幼稚園教育研究協議会 夏季研修会

子どもの育ちと学びをつなぐ幼小連携

ー幼小をつなぐ生活科の教科特性&「接続期カリキュラム」の意義と作成ポイントー

上越教育大学大学院

教授 木村 吉彦 様

期日：平成 27 年 8 月 3 日

会場：朱鷺メッセ

1 幼児教育と小学校教育の違い

子どもにとって、幼稚園から小学校への入学とは、遊び中心の生活から（教科）学習中心の生活へと生活スタイルが大きく変化することである。

- 幼稚園・・・ 遊び中心の生活である。幼稚園教育における遊びとは、内なる課題（自分で決めた課題）を自分の力で実現する自己実現体験である。子どもたちは遊びを通して、様々な資質や能力を身に付けていく。それらは、無自覚の学びであり、教師は無自覚の学びから、自覚的な学びになるよう、声を掛けたり、褒めたりすることが求められる。(P4 「遊びの意義」参照)
- 小学校・・・ （教科）学習中心の生活である。つまり、外から与えられた課題に対応していくことであり、そこには自覚的な学びがある。



↓
幼児教育は遊びを通して、小学校教育は教科を通して、子どもたちが「学び」の中から様々な資質・能力を身に付けているという点では、共通している。

しかし、質の違いはあり、ここからは「教育目的論」「教育方法論」「教育評価論」の3つの視点から幼児教育と小学校教育の違いを示していく。

(1) 教育目的論から

〈幼児教育〉

『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』（3歳児以降は幼稚園教育要領と同じ）の「ねらい」は、育てたい子ども像であり、子どもの育ちの方向性を示す教育目標である。

||
方向目標中心



〈小学校教育〉

例えば、教科・体育のねらいとして、「運動好きの子どもを育てたい」という方向目標もあるが、実際の授業の中では、点数化されるなど、その達成度や到達度を中心に授業が展開される。

||
到達目標中心

(2) 教育方法論から

〈幼児教育〉

教育のねらいを環境（物的環境・人的環境）に反映させることによって、子どものやる気や主体的な活動を引き出そうとする教育の方法である。

||
間接教育中心（環境を通して行う教育）



〈小学校教育〉

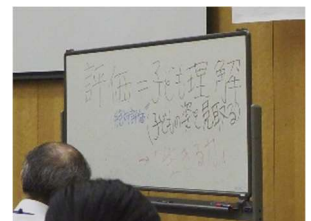
教師のねらいや意図を直接指示したり、教科書中心で行われる教育の方法である。

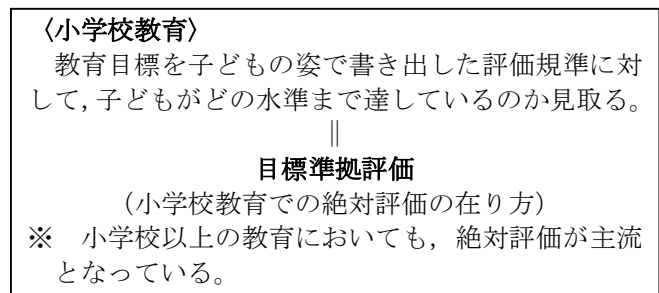
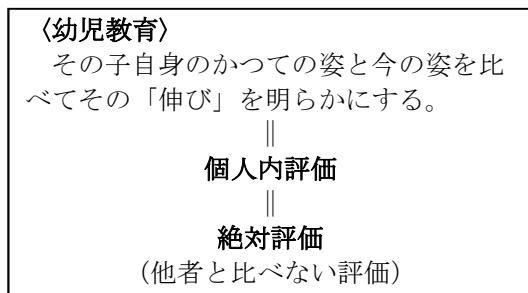
||
直接教育中心

※ 生活科は、物的環境や人的環境を大切に
した間接教育に近い。

(3) 教育評価論から

評価とは、子ども理解であり、子どもの姿や育ちを見取ることである。そして、最終的には「生きる力」（外からの課題を内なる自分の課題としてしっかりと受け止め、考え、話し合い、決断して実行に移すことができる力：3.11の宮城県の中学生の事例より）や「生きる力の基礎」の育ちを見取ることである。





※ 幼児教育でも小学校教育でも、他者との比較ではなく、絶対評価の考え方に基づく「一人一人の生きる力」の育ちが評価の対象となる。

※ 教育評価論における幼児教育と小学校教育の違いを挙げるならば、評価の表し方（指導要録の書き方）に違いがある。つまり、子どもの姿を日本語で具体的に表していく幼児教育における指導要録に対して、評価規準のどのレベルまで達しているのかを3段階（ABC）評価などで記述していくのが小学校教育における指導要録の書き方である。

2 幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科とは

(1) 教育目標論から

- 生活科の究極的な目標は、「自立への基礎を養う」ことである。人間が主体性や社会性を身に付け、社会人として独り立ちするための基礎を育てるという子ども像が示されており、明らかに「方向目標」である。
- 実際の授業では、独り立ちするための資質や能力を「到達目標（行動目標）」として設定して授業展開されている。

生活科の教育目標は、「到達目標を内に含んだ方向目標」

(2) 教育方法論から

基本は物的環境や人的環境を大切にした間接教育である。しかし、「教え込み」「指示・命令」は極力控えるが、振り返りをしてシート表記を指示するなど、適宜直接教育も取り入れた指導が行われる。

(3) 教育評価論から

- 生活科ではその子の「伸び」を認めて褒めてあげることが大切であり、基本である。
- 小学校教育なので、「評価規準」を書き出さなければならないが、その「評価規準」に対してどのレベルまで達しているかなどを見極めることが評価活動になる。

生活科の評価は、「評価規準」を前提とした個人内評価

(1) から (3) より生活科とは、幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科であり、幼小連携の鍵を握る教科である。また、幼児期の学びと新入児童1年生の学びをつなぐ役割を果たしていると言える。

3 幼児期の学びと新入児童1年生の学びをつなぐ接続期カリキュラム

接続期カリキュラム { アプローチカリキュラム (5歳児後半の6ヶ月): 横浜市教育委員会が命名
スタートカリキュラム (小学校入学後1ヶ月): 指導要領解説 生活編に掲載

(1) アプローチカリキュラムとは (田上町立 アプローチカリキュラム基本構想 参照)

幼児教育の本質に基づく「生活リズムの変化」を提供し、小学校生活への「適応」を促すことを目的とする。(午睡をなくす・集団による遊びや集団活動を取り入れる・椅子に座って話を聞く場面を設ける・小学校との交流授業や行事への参加 など)

(2) スタートカリキュラムとは (長野県茅野市幼保小スタートカリキュラム ビデオ参照)

児童が、幼児期に体験した遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのことである。

最後に 「Teacher」もいいけど、「Educator」を目指しましょう。

「educate (教育する)」の元々の意味は、引き出しを開ける(外から見て何が入っているか分からないものを引き出して中身を明らかにする)である。つまり、幼児教育や小学校教育では、子どもの思いや願い、興味、関心、意欲、好奇心、探究心、自己表現力などを引き出し、そして、最終的には「その子のもつ可能性を引き出してあげる」のが教師の最も大切な役割である。